

いい子に育てる



「這えば立て、立てば歩めの親心」といわれるように、子どもが成長するにつれ親の望みは次第に高くなっていきます。そして、親は子どもよりも経験がありますから、子どもがやっていることに、「ああしたら」「それじゃ、ダメ」「そんなことしたら、うまくいかなーい」などと口を挟みたくなるものです。

でも大人が正しいことを子どもに伝えれば、子どもはその通りに正しい行動を身に付けるかといえ、そうはいきません。大人だってお酒は飲みすぎない、腹八分目で食べるのが良いとわかっけていてもなかなかそうはできません。子どもも同じです。子育ては、理科の実験のようにはいかないのです。親があまりに正しいがゆえに、自分の気持ちや考えを率直に言えずに、期待という荷の重さにつぶさ

れてしまう子もいます。

子育てで肝心なのは、子ども自身が自分うちの子として大切にされていると実感しているかどうかです。

時々わが子がこうなったのは、自分の育て方が悪かったからだとおっしゃる方がいますが、仮に過去に何かがあり、原因が分かっても何の解決にもなりません。親は万能ではありませんから、失敗もします。過去に目を向けて落ち込むよりは、これからを考えてみましょう。

例えばこの頃しかってばかりいるなと思つたら、しかる前に五つ数えてみましょう。カッとしたときの言葉は自身の心を荒げ、怒りをエスカレートさせやすいものです。とっさに水を飲んだり、その場を離れるのもよいかもしれません。子育てにマニュアルはありません。でもちょっとした「こつ」が分かると、荷が少し軽くなるのではないでしょう。

「ちょっと待っててね」

「ねえ、ママ」「ちょっと、待っててね」
ママと知り合いのおばさんの話は、なかなか終わりません。

「ちょっと」って言ったのに。
「もう少し」「すぐ終わるから」って言ったのに。

大人が何か用事をしているときや子どもが留守番をするときなど、子どもが待てる時間はそう長くはありません。あるいは、乗り物の中で「静かにしててね。すぐに着くから」と言われて静かにできるのは、3歳くらいでは5、6分が限度です。

「ちょっと、ここで待っててね」「すぐ買ってくるから」「ここを動かないでね」。そう念を押したのに、その場に戻ったら子どもがいらない、そんな経験はありませんか。

時間の感覚が十分に育っていないために、子どもが受け止める「ちょっと」「や」「少し」は、大人が考えるそれとは、ずれがあります。15分という時間は子どもにはとても長く、不安な時間に感じられます。お母さんやお父さんがどこかに行ってしまったのではないかと不安のあまり探し回ってしまうこともあります。揚げ句の果てに「待っててねって、言ったでしょ」「あれほど、動いちゃいけないよって言ったのに」と叱られてしまいます。

成長するにつれ、次第に時間感覚が育ち、少しずつ待つことができるようになります。時計の絵を描いて、「この針がここまで来たらこれをしようね」とか、「ここまでの間にこれをするのも一つの方法です」。

公平に接するということ

きょうだいが二人以上いるとき、どの子にも平等に接することや、一人ひとりを大切にすることは案外難しいものです。

「どっちが上手」

「僕のほうが速いよね?」

と、歳が近いほど、親をめぐる争いも生じます。ことに二人きょうだいの場合には、互いに自分のほうが大事にされたいと張り合うこともしばしばです。

先日、あるお父さんがためらいがちにこんな質問をされました。

「下の子を〇〇へ連れて行ってやりたいのですが、上の子も一緒に連れて行くべきですよね」

この方は、休みの日にはお子さんの好きなことに付き合おうと考えてきなお父さんです。一人

ひとりを大切にしたい。でも、きょうだいで扱いを変えると不公平になるのではないか。それぞれの子どもの願いはかなえてやりたいが、この身は一つ。連れて行かない子に寂しい思いをさせてしまうのではないかと、氣遣ったの質問でした。

こんなとき、一緒に連れて行くよりも、今日は私（僕）がお父さん（お母さん）を独り占めできる日、次の休みはきょうだいの日というようにしてみてはいかがでしょうか。きょうだいと言っても、年齢も興味関心も異なります。一緒に連れて行っても、同じものを与えても受け止め方はそれぞれです。ある子は喜んで別の子が喜ぶとは限りません。自分だけの特別な日は、自分が大切にされている証しとして、それぞれにきつと良い思いになるでしょう。

安心の補給基地

いま至るところで耳にする「安全」「安心」という言葉ですが、子どもたちの健やかな成長にとっても欠くことができないキーワードです。子どもにとつての「安全」「安心」、それを保証するのは、言うまでもなく子どもと生活を共にする大人です。

2歳ごろまでの子どもは、目の前から見えなくなったものは、無くなってしまったと捉えています。ですから、そばにいますと思っていたのに、その大人がいないうちに気付くと、不安になって大慌てで探します。大人がおちおちトイレにも行かれないのもこの頃です。

また、よく寝ているからと、子どもが昼寝をしているうちにちょっと用足しに出掛けたら、そういうときに限って目を覚まし、子どもが大泣きしていたという経験はありません

か。

いつも世話をしてくれる人がそばにいないと、不安を静めることができません。見慣れないものがあっても、片手はそばにいたる大人の服や体に触れたまま、もう片方の手で確かめることができます。びっくりしたり不安になっても、大急ぎで駆け寄ってしがみついたり、膝の間に顔をうずめたりして、「安心」を充電します。

驚いたときや不安なとき、身近な人に触れる（見る）↓安心をもらう↓自分の遊びに戻る。こんな流れができていると、パニックを起こさずに自分の気持ちをコントロールできる子、好奇心旺盛な子に育っていきます。



絆の貯金

「子どもが思い通りに育たない」「自分の子育ては間違っているのだろうか」「こんな気持ちを抱いたことはありませんか。」

どのような子育てが正しいのか、迷いは尽きませんが、残念ながらその答えはどこにもありません。時折「こうすればうまくいく○○」といった本がありますが、その通りに育てたとしても。望み通りの子に育つ保証はありません。

では、親が子どもにしてやれることは何でしょうか。

小さい子どものお父さんやお母さんにとっては、まだずっと先のことに思われるかもしれませんが、10歳を過ぎるころから少しずつ親離れを始めます。その時期までにしておきたいこと、それは親子で「ああ、おもしろか

ったね!」と言える経験をたくさんしておくことです。

公園で一緒にサッカーボールを追いかけたり、シーソーに興じたり、砂山にトンネルを作ったりなどなど。何か特別なことをする必要はありません。一緒に笑い、一緒にびっくりする体験こそが大切なのです。

子どもは成長するにつれて、いろいろなことを経験します。難儀な経験もあるでしょう。それを乗り越える力になるのが「親はわかってくれる」「こんなとき親ならどう思うだろうか」という思いです。それが感じられれば、大抵の危機を乗り越え成長していきます。

さあ、今から親子の絆の貯金を始めませんか。

ママの目は怒ってる

マー君は、妹とけんかをして、思わず手が出てしまいました。妹は、泣いてママに助けを求めます。そこでママはマー君に「どうして、たいたいの」と聞きました。マー君は黙ったまま、何も言いません。「ママ、怒らないから言っごらん」「マー君は下を向いたままです。

.....

「黙っていちゃ、わからないでしよ」

「怒らないって言ってるでしよ」

「だって…」

「ママの目、怒ってるもど」

.....

ママは冷静にマー君の言い分を聞いてうと思つてのことでしたが、じつは言葉には裏腹に、表情は険しかったようです。

表情は実に正直です。出すまいとしても、素直に気持ちを表してしまいます。言葉を十分に理解できない幼い子どもは、周りの人の表情やしぐさ、雰囲気などを頼りに状況を理解します。マー君は、「怒らないから…」と言うママの言葉ではなく、その表情からママが言いたいことを理解したのです。

また、ここでママがはじめに言った「どうして」という表現は、よく使われる問い掛けですが、理由を問うよりも、子どもは叱り言葉として受け止めがちです。「マー君は、どうしたかったのかな」とか、「ママは、〇〇してくれるとうれしいな」といった表現を工夫してみてください。



小さいころの話

「ぼくが小さかったとき、どんな赤ちゃんだった？」

マー君はママに、時々小さかったころの話をせがみます。

「元気によく泣く赤ちゃんだったよ」

「ママ、大変だった？」

「マー君は、ママにとって始めての赤ちゃんだったから、どうして泣いているかがわからなくて、困ったこともあったな」

「赤ちゃんって、お話できないもんね」

「でもマー君は、お乳を飲むとき、じーっとママの顔を見るの。一生懸命飲んで、ちょっとお休みしては、ママを見るのよ。その黒い目がキラキラしているの」

「へえ。ママと、目でお話していたんだ」

「それに赤ちゃんってね、やさしい甘い匂い

がするの。ぎゅって、抱きしめたくなるの」

小さいころの話を聞いてマー君は、今は話すことも走ることもできるお兄さんになったことや、愛されてきたことを確かめているかのようです。

子育ての過程では、初めて「マンマ」と言ったときのこと、一人で歩いたときのこと、ダンゴ虫探しに夢中になったことなど、それぞれの家庭で、ほほ笑ましいエピソードがいくつもあることでしょう。

その語りを通して、子どもは自分が大切に育てられてきたことを感じるができます。そしてそれは、自分を大切にし、周りの人を大切にしている心の原点です。

子育ても立派なキャリア

Aさんは、0歳のミーちゃんと3歳になるユ一君のお母さんです。外遊びが大好きなユ一君は、起きるやいなや、「お外へ行く」と飛び出そうとします。「ちょっと待って」「外は寒いから、ちゃんと服を着ようね」

その傍らでは、ミーちゃんが箱からティッシュペーパーを取り出してご満悦。「あくあ、またやられた…」思わずため息が出ます。

洗濯や掃除、料理といった家事はもちろん、食事のたびに口の周りをひげだらけにする二人と格闘し、転んでビショビショ、どろどろになった二人を追いかけていると、あっという間に一日は終わります。夜は子どもを寝かしているつもりが、自分が先に寝入ってしまうありさまで。育児雑誌に見るファッショナブルなお母さんと似ても似つかない自

分、すてきなインテリアに囲まれた部屋と無縁なわが家。新聞を読む間もなく、何か社会から取り残されたような気分です。

でも育児は立派なキャリアです。キャリアには経済的な対価を得るワーク・キャリアの他に、自分や周りの人の人生を豊かにするライフ・キャリアがあります。このキャリアを通じて、段取りよく取り組む力や予定が変わっても臨機応変に対処する力、子どもの気持ちに添う力、子どもの持ち味に気付きそれに合わせて関わる力が育ちます。そして何よりも子育てを通じてネットワークが形成されます。これらは皆、子育てという役割を果たすことによって得られる力です。



きょうだいが生まれる

自分の誕生日に妹が生まれた人の話を聞いたことがあります。ワクワクして待っていたその日に、急にお母さんがいなくなり、周りの大人たちが皆そわそわしだして、自分一人が取り残されたような心地がしたそうです。

この方はすでに成人しており、私に笑い話として語ってくれたのですが、それまで大切にされ、皆のまなざしを一身に浴びてきた自分が感じた、支えを失ったその心もとない感じを今でも覚えていると話してくれました。

赤ちゃんの誕生は、家族にとって喜ばしい出来事です。しかし多くの場合、3歳前後しか離れていない上の子にとっては、妹や弟の誕生は自分を取り巻く世界がガラリと変わる一大事です。

赤ちゃん同様、家族みんなにとって大切な

子であること、それは今までと変わらないことを、抱きしめたり、頬ずりしたりして、しぐさや表情でたっぷりと伝えてください。

「お兄ちゃん（お姉ちゃん）になったんだから」という言葉を掛けがちですが、本人の甘えたい気持ちを封印しかねません。まず甘えたい気持ちをしっかり受け止めることが先決です。4歳、5歳以前の子どもにとっては、理屈ではなく、目に見える、肌で実感できる世界こそが全てだからです。

自分が大切にされていると感じて初めて、誕生したきょうだいを大切な存在だと受け止める、一緒に誕生や成長を喜ぶことができるのです。



ぼく、できるもん

「ぼく、できる」「ぼく、知ってるもん」を連発するマーちゃん。でもママは「できっこないのに」「知ってるはずなのに」と少々不安です。

こんなとき「あなたには、ムリ」「できるわけではないでしょう」と否定せず、「できるといね」「そう、お母さんにも教えて」と、まずはその言葉を受け止めてください。この子はできないことを言う、とそれをだしなめる必要はありません。やってみて、できなかったとき「残念だったね、またやってみようね」とひと声添えてみてはどうでしょう。

幼いときは、自分は何でもできるという感覚（全能感）を持っています。わが家の隣に住むタケシ君は、「おばちゃん、見て、見て」

「タケ君すごいね、って言って」と盛んに私に感嘆の言葉を催促します。

子どもにとって、できるかどうかよりも、自分にとって大切な人に、できる自分、すごい自分を認めてほしいのです。

大人に期待されるのは「鏡」の役割です。私たちは身繕いをするときに鏡を見ますが、鏡は「似合わない」とか「配色が変だ」などと言いません。鏡に映った自分の姿を見て、自分でいいかどうかを判断します。

子どもも、自分にとって大切な人という鏡に映った自分を見て、自分のイメージを形作っていきます。そして遠からず、自分が何でもできるとは限らない、と知ることになります。

幼いときに全能感を十分に満喫し、それを受け止めてもらえた子は、成長の土台がしっかりとした子に育っていきます。

絵本の思い出

土曜日や日曜日に休めない、あるいは夜遅くまで仕事があるお父さんお母さんが増えていきます。子どもと触れ合いたくても、その時間がなかなかとれない、いつも見るのは寝顔ばかりという方もいるのではないのでしょうか。そんな方も、たまの休みや子どもが寝る前のひととき、気軽に子どもと絵本を楽しんではいかがでしょうか。

先日、ある新聞の「読書日記」欄に、新進気鋭の哲学者が幼いころに読んでもらった「しよぼうじどうしゃじぶた」(渡辺茂男作、福音館)という本をとりあげていました。ご存じの方も多いかと思いますが、はしご車やポンプ車、救急車の陰で目立たなかった小型消防車「じぶた」の活躍を描いた本です。筆者は「ちびっこでも、性能がいいんだぞ」と

いう台詞に込められた気持ちをいつまでも大切にしたいと結んでいました。40年余り前に書かれたものですが少しも古さを感じさせません。私も子どもが4歳、5歳のころ、せがまれて何十回となく読んだ本です。本を読むと、子どもたちは機嫌よく寝てくれました。毎晩2冊という約束でしたので、子どもたちは寝る前にどれにしようかと選ぶのも楽しみだったようです。

絵本は、心に響く言葉を与えてくれます。そして何よりも一緒に絵本を囲んだ思い出は、家族とのぬくもりのある記憶として残ります。どこかへ出掛けられなくても、大丈夫。堅苦しい目的は脇に置いて、短い時間だけでも絵本を通して触れ合いを楽しんでみませんか。

痛いよう……

大声を上げて泣くタロウ君。転んで膝を擦りむいてしまいました。「痛かったね」「痛いの、痛いの、向こうのお山へとんでけえ」おばあちゃんは早速おまじないをしてくれました。

子どもが転べば、泣くのは当たり前。痛ければ泣くのは当然だと思われがちですが、果たしてそうでしょうか。

実は「痛い」と言ったとき、「痛かったね」と受け止めてもらった初めて「痛い」という状態と「痛い」という言葉が結びつきます。泣く子を弱虫とか、意気地がない、わがままな子と否定的に受け止めがちですが、泣く子は自分の感情を率直に表現できる、表現して

も大丈夫だと感じている子なのです。

子どもは、悲しいとき、寂しいときや不安なときだけではなく、痛いとき、疲れたとき、空腹のとき、あるいは悔しいときやいら立つときにも泣きます。泣いている子に、大人は「それくらいのことでは泣かない！」と否定したり、周りの人に迷惑をかけているとか、恥ずかしいと思うあまり、「泣いてちゃわからないうでしよう」と、まず泣くことをやめさせようとしがちです。

でも、それよりもまず「痛かったね」「寂しかったね」「負けて悔しいね」と、きっとその子がそのとき伝えたかった気持ちを、言葉にしてあげてください。そうすることで子どもは次第に自分が今感じている状態や気持ちを言葉で表すことができるようになります。そしてやがて、状況に応じて、人の気持ちを理解することができる子になっていきます。

やりたいことの種

「別にいいです」「やりたいことは、特にいいです」。これは、卒業後の進路を決めなければならぬときに、高校生や大学生の口から時折漏れる言葉です。こんなとき、私は彼らによく「小さいころを振り返ってみて。興味をもったことは何？」と問い掛けます。それは、幼いときに夢中になったことを探っていると、意外に自分の進路を考える種が潜んでいるからです。

自分は何が好きで何が嫌いか、どんなことが得意でどんなことが苦手か、それらはやったことがなければ、まだ見たり聞いたりしたことがなければ、気付きません。将来に向けた種は、幼いときからの経験の積み重ねです。年末年始は、クリスマスや大晦日、正月など、それぞれの家庭や地域に伝わる行事が多

いことでしょうか。ぜひ子どもたちにも、年齢に応じた何らかの仕事を体験させてほしいと思います。大人だけでやってしまう方が手早いのですが、ぜひ年末の掃除や飾りつけ、季節の料理づくりなど、手伝いを頼んでみましょう。また日常の生活では減ってしまった、よその家への訪問やお客様を迎えること、あるいは年長の方や年下の子との関わりや年末年始のあいさつなどを体験する絶好のチャンスです。

子どもには、自分で体験しなくても人がやっているのを見るだけで、それを身に付ける優れた能力があります。子どもに多様な経験をと言つと、何か習い事をさせるとか、どこかに連れて行くことを連想しがちですが、そうした外部の人や事に頼らずとも、この季節は、いつもとちょっと違う経験ができる。子どもにとって貴重な季節です。

子どもが、かわいいと思えない

母親がこつこつぶやいたとしたら、「親として未熟」「親失格」でしょうか。あるいは周囲の人から「まだ小さいから、大変だよね」「思うようにならなくてつらいよね」と受け止めてもらえるでしょうか。

親業は「本日の営業は終了」とは言えませんが、特にきついのが、家庭で一人で子どもを育てている方の場合です。営業時間は不定期ですし、予測がつかないことばかりです。過保護でも放任でもまずいのです。まさに想定外の連続です。また学業や仕事とは違って、自分のペースでは進みません。子どもが小さいときには、新聞や雑誌を読む時間や、ドラマや映画を楽しむゆとりもないかもしれせん。自分のペースで過ごせないことほど、疲れるものではありません。家にいるから気楽で

はないのです。

先日、男性の育児休業の取得率が平成23年度は2・63割と過去最高になったと報じられました。この割合はまだまだ少ないのですが、子育ての楽しさとその大変さを、両親で共有できたらすてきですね。お互いの力を改めて見直すきっかけになるのではないのでしょうか。子どもとゆとりをもって関わることによつて「かわいい」という気持ちが生じます。子どもは無邪気で天真らんまんという見方がされやすいのですが、時にはわがままで、あまのじゃくです。悪魔に見えるときだってあります。決してかわいいだけの存在ではないのです。家族と子育てを共有できるとき、そこにゆとりが生まれ、「その子の良さ」に気付くことができるのではないのでしょうか。

一緒に遊んで、子育てを楽しもう

「育メン」、最近では加えて「育ジュー」と、男性の育児や家事への参加が求められる時代になりました。

ある民間企業による「父親の子育てへの協力度について」の調査で、興味深い結果が出ています。小学生や中学生を持つ母親を対象に調査したところ、父親が子育てにとても協力的だと回答した家庭では、父親が「子どもと一緒に遊ぶ」割合が高く、その割合は小学生では70割、中学生でもほぼ50割に達しています。「子どもに勉強を教える」や「炊事や洗濯などの家事」などとの関連も検討しているのですが、もっとも関連があったのが「子どもとの遊び」だったのです。ちなみに「あまり協力的でない」「全く協力的でない」と回答した家庭では、小学生でも「よく遊ぶ」割

合は5割以下でした。遊びを通して、父親は子どもの様子をよく理解していると感じることが、こうした結果をもたらしているのではないのでしょうか。

父親が子育てに協力的だと感じると母親の子育て不安は少なくなりますし、子どもは親との遊びを通して、自分に関心を持ってきている、大切にされていると実感できます。

「父親の出番は子どもが思春期になってから」という考え方がありますが、これは幼いときから遊びを通して培った関係があったからこそです。まだ先の思春期ですが、そのときになってから、子どもと向き合おうとしても、それまでに信頼関係が形成されていなければ、何を伝えても「うっとうしい」存在でしかありません。

お父さんも遊びを通して一緒に子育てを楽しみませんか。

赤ちゃんは語学の天才

マーちゃんは生まれて3か月半。近頃盛んに、泣き声とは違う声でおしゃべりするようになりました。言葉という存在を知らない赤ちゃんは、どのようにして言葉を身に付けていくのでしょうか。

例えば赤ちゃんに向かって「オナカガスイ タノカナ」と語り掛けたとします。言葉の存在を知っていれば、「オナカ」「ガ」「スイタ」「ノ」「カナ」と分けることができます。でも赤ちゃんは、どこで区切られるのかを知りませんし、そもそも名詞や助詞、動詞などの文法を知っているわけではありません。

また「マンマデスヨ」と言われても、「マンマ」がスプーンに載せられたおかゆのことなのか、スプーンのことなのか、あるいは「マンマ」をくれるママのことなのか分かりませ

ん。「マンマ」だっておかゆであったり、バナナだったり、お魚だったりといろいろです。

こうして考えると、全く無の状態から、言葉を身に付ける赤ちゃんの力には驚くばかりです。周りの人から語り掛けられる音の中から「マ」「ン」「マ」の三つの音がいつも一緒に使われる塊であることを見つけ出し、それはいつも決まった状況の中で使われ、やがてそれが意味のあるものであることを理解していきます。

赤ちゃんは周りの変化を敏感に受け止め、その変化の中に規則性を見つけるすばらしい能力を持っています。単に大人の模倣をしているわけではありません。周囲の大人の丁寧な語り掛けを手掛りにして、赤ちゃんは自分の力で言葉を学んでいきます。



コミュニケーション力を育てる

近年、若者たちのコミュニケーション能力不足がしばしば指摘されています。当の彼らも「自分は人と話すのが苦手です」と認めることが多いようです。

こうした時代だからか、企業は採用選考においてコミュニケーション力を重視しています。昨年の経団連調査では、採用担当者の実に82・6%が重視していると答えました。

きょうだいの数が一人か二人となり、保育園や幼稚園、学校も少人数学級の昨今、大人の目配りや気配りが届きやすくなりました。家庭では「ご飯」と言えば食事が並び、「痛い」と言えば「どこが痛い」「転んだの」「けんかしたの」「誰かにいじめられたの」と、本人が伝えようとする前に、周りの大人が聞いてくれます。そして本人に良いように環境を整

えてくれます。

しかしコミュニケーションは、「伝わらない」経験や、「分かってほしい」という気持ちがないければ始まりません。一言で思いが通じてしまう環境では、「人」と、ことに「見知らぬ人」とコミュニケーションしたい、しなければならぬという意欲は湧いてこないでしょう。

幼いころ、大人が子どもの気持ちを察して言葉にしてあげることが大切ですが、子どもが伝える前に大人が全てやってしまつては、人に分かるように自分の思いを伝える力は育ちません。必要のないところには能力は育たないからです。

「ご飯」と言ったとき、あえて『「ご飯」だけじゃ分らないよ。どうしてほしいのかな』と語の掛けてみてください。

子育て応援団



生まれて5か月になるマーちゃんはお父さんとお母さんの三人家族です。昼間は、目下育児休業中のお母さんと過ごしています。

お母さんは「マーちゃんは近頃、お父さんが夜に仕事から帰ると、私には見せないような笑顔を見せる」と言います。お父さんは「高い、高い」をしてくれたり、くすぐったり、面白い顔をしたりと、お母さんと一味違う接し方をしてくれます。こんなお父さんとのやり取りがうれしいのでしょうか。

子どもが幼いうちは、母親が育てるのが一番という考え方がありますが、子どもは、自分が求めているものを察して、それに応えて

くれる人が大好きです。生まれた当初こそ母親との結び付きが強いのですが、周りの人との関わりが豊かになるにつれ、次第に複数の人を頼りにするようになります。眠いときやおなががすいたときにはお母さんのところ、遊びたいときにはきょうだいのところ、外へ遊びに行きたいときにはお父さんのところへといった使い分けをするようになります。ちなみにマーちゃんは、寝るときには、お母さんよりもお父さんの方がいいようです。

子どもが健やかに育つためには、大人の手助けが必要です。子どもにとってはお母さん一人よりも、多くの人から世話を受けられ方が好都合です。子どもはお乳をくれるから、あるいはいつも一緒にいるから、その人と気持ちに通い合うようになるわけではありません。お母さんがゆとりを持って子どもに接することができるように、子育て応援団は多い方がいいですね。

困った口癖

ケンちゃんは元気のいい5歳の男の子です。ケンちゃんのお母さんの目下の悩みは、ケンちゃんが友だちに向かって「バーカ」と言うことです。

ケンちゃんが「バーカ」と言うたびに、お母さんは、「友だちに、そんなこと言っちゃいけないよ」「ごめんね」って言いなさい」「バカ」って言われたら、友だちはどんな気持ちになるかな」と、たしなめるのですが、一向にやみません。どうしたらケンちゃんのこの困った口癖を減らすことができるのでしょうか。

私たち大人は、子どもが何か好ましくないことをすると駆け寄って、声を掛けます。例えば、友だちの輪の中に入れずに一人ポツンとしている子がいれば、そばに行き「入れて」

って言うてごらん」と声を掛け、その子を友だちのそばに連れていくといった具合です。そして仲間に入ったことを確かめると、その場を去ります。

つまり大人は子どもが望ましくないことをしているときには、目を向けたり声を掛けたりするのですが、望ましい状態のときには、あまり注目したり振り向いたりしません。望ましくない行動をすれば大人が自分に注目するので、そうした行動が強められることになります。大人は良かれと思って働き掛けるのですが、意図とは反対に、子どもにやっほしくない行動を促してしまうのです。

実はケンちゃんの場合、「バーカ」と言わずに友だちと仲良く遊んでいるときこそ、「ほめどき」です。「仲良く遊んでいるね」「楽しそうだね」と声を掛けてみるのです。

人見知り



ある日の乗り物の中の出来事です。人がいっぱいなの、しかも身動きがままならない空間のせいでしょうか。生後7か月〜8か月くらいの赤ちゃんが泣き始めました。お父さんとお母さんは交代であやしていました。が、なかなか泣き止んでくれません。乗り物を降りるまでの30分間ほど汗だくの様子でした。

ところで赤ちゃんは、生まれたばかりの頃から人の顔をしっかりと認識することができません。そして3か月ぐらいたともなると、大人と子どもの区別や、男性と女性の区別ができるようになります。

さらに半年を過ぎる頃から、見慣れた顔とそうでない顔を区別します。皆さんは、友人や知人の赤ちゃんと会ったとき、まばたきひ

とつせずにじーっと見つめられた経験はありませんか。赤ちゃんからすれば「この顔は見覚えがあるな」「いや、これは見覚えがない顔だ」という訳です。先ほどの赤ちゃんは、ひよっとすると周囲に見慣れない顔がたくさんいる環境が落ち着かなかったのかもしれない。

とかく人見知りは、困ったこととみなされやすいのですが、確実に心が成長している証です。大家族の場合や人の出入りが多い家庭では、日頃からいろいろな顔に出会っているからでしょうか、人見知りが少ないようです。人見知りかひどい場合、外出を控えるのではなく、逆に人と触れ合う機会を増やしてみてもどうでしょうか。人との関わりの中で、赤ちゃんはほほ笑みや喜びの表情を皮切りに驚きや恐怖といったさまざまな表情も学んでいきます。